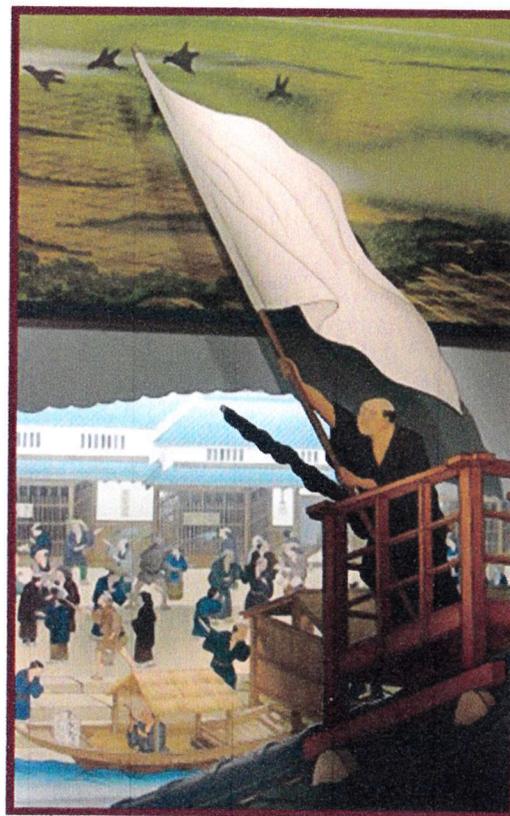


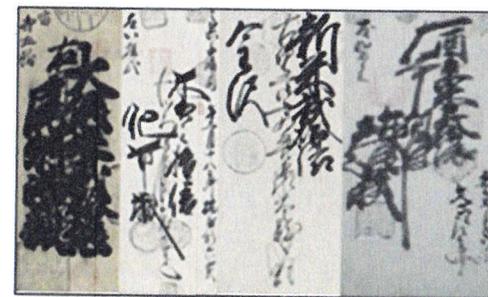
淀屋が始めた 米市場と旗振り山



堂島米会所



旗振り通信



各藩の米切手

淀屋研究会 大江昭夫

<" 淀屋 " とは>

前期淀屋

- ・初代 淀屋常安 (じょうあん) = 岡本三郎右衛門常安 (おかもとさぶろうえもんじょうあん) (1650年生まれ?)
- ・二代 淀屋言當 (げんとう) = 个庵 (こあん)
- ・三代 淀屋簡齋 (かさい)
- ・四代 淀屋重當 (じゅうとう)
- ・五代 淀屋言當 (こうとう)……**關所** (けっしょ) 宝永2年 (1705年)

※ 淀屋……強制閉店 宝永2年(1705年)

※“淀屋”を名乗るのは、秀吉から淀川堤の普請を請け負うようになってからだと言われる

後期淀屋 (倉吉と大坂)

- ・初代 牧田仁右衛門 (じんえもん)

↓ 天和2年(1682年) 牧田淀屋(倉吉) 開店

↓

- ・大坂 淀屋清兵衛 宝暦13年(1763年) 大坂淀屋 開店

↓

- ・八代 牧田孫三郎 (まごさぶろう)

- ・五代 淀屋清兵衛

※ 牧田淀屋(倉吉)・大坂淀屋 同時閉店……自主閉店 安政6年(1859年)

<淀屋米市(淀屋敷庭先)(1620~30頃?) → 堂島米市場(堂島浜)(1697~) → 堂島米会所(堂島浜)(1730~)>

大坂の陣が終わり、世の中が落ち着きを取り戻すと、常安(初代淀屋)が予測した通り流通経済が発展して行った。米本位制であった経済は、いち早くその中心となり大坂と京都を挟む大都市である近畿地方は、当時、町人や公家、僧侶など米の消費者が70万人もいた。しかし、人口に対して米が毎年60万石以上も不足していた上、当時は船で米を運ぶにも、大きな港のある大坂はうってつけの場所であった。

この頃、全国で年間、2700万石程度の米の収穫があり、自家消費や年貢などで消費された残りの500万石程度が市場に出回っていた。そのうちの約4割(200万石)が大坂だけで取引されていたのではないかとされており、まさに米の大市場だったといえる。この200万石に目をつけたのが淀屋で、秀吉の時代、加賀百万石の前田家から、10万石の米の売り捌きを請け負っていた実績もあり自分の屋敷の庭先で米市を創設したのである。これを**淀屋米市**と言う。勿論、私設市場→プライベートマーケットである。

当初、大坂登米を士豪的商人(徳川氏に近い特権階級の商人)と呼ばれるブローカーに丸投げし任せていたが、メリットも少なく、信頼性にも欠けていた。そこで蔵屋敷を設置し、新しい商人から蔵元、掛屋を登用し、自主流通ルートを確認するようになる。

各藩はそれを習い蔵屋敷が急激的に増えた。取引量が増えれば、現物の米を、その度に蔵屋敷からあちこちに動かしているわけにはいかず、そこで考えだされたのが“米手形”である。(当初は“先渡し取引”(Forward)が主流であったと考えられる)

この“米手形”、丸代金の1/3を払えば発行され、これが1日のうちに10人以上の人に転売されるなど、投機に対象となって行く。そして次第に大坂未着の米どころか、刈り取り前の米にまで“米手形”が発行されるようにエスカレートして行った。

「淀屋米市」は順調に実績を積み上げ、賑わいを見せますが、大坂の米市場を決定的に全面的に牛耳るようになったのは、後に「兵庫の北風か北風の兵庫」と噂された“北前船”で有名な神戸の回船問屋“北風彦太郎”との業務提携である。この“北前船”で米を搬入し、淀屋の米市で捌く…このシステムが市場を圧巻した。

「淀屋米市」の取引量は急激に拡大して行った。特に帳合米(先物=Futures)取引の拡大は目覚しく、手狭になったため元禄10年(1697年)土佐堀川を渡った堂島浜に“市場”を移す。これが**堂島米市場**である。これにより「堂島米市場」は更に繁栄を極めて行く。

しかし、宝永2年5月(1705年)「百万石の大名を凌ぐ」と称され、栄耀栄華を極める淀屋は、幕府から「町人の分限を超えた奢侈(しゃし)は不届き」であると“**闕所**”(けっしょ)を命じられた。この裏には西国大名への“大名貸し”の貸付額が膨大(100兆円超)になり淀屋の力を恐れた幕府が強権を発動したのではないかとの憶測もある。

淀屋闕所以後、約25年間リスクヘッジを含め、広義な意味で価格安定に寄与した先物市場の「堂島米市場」は閉鎖となる。その間、現物の相対取引は継続されたが、流動性に乏しく市場性を失った米価格は、急騰急落の乱高下を繰り返す事となる。

淀屋の「堂島米市場」が閉鎖された以降は、荻原重秀(勘定奉行)の貨幣改鑄による**インフレ政策**や、新井白石による財政緊縮の**デフレ政策**が次々に打ち出され混乱を極めた。合わせて富士山の大噴火(宝永の大噴火)や淀川の大水害など、自然災害も重なり米価は乱高下し、幕府・武士階級・庶民に至るまで巻き込んで経済的混乱に陥れた。

そんな中、大坂商人は様々な困難、試練を乗り越え、紆余曲折の末、ようやく、“米將軍”と言われた八代將軍 吉宗 から、念願の米市再開の公許を取り付け、享保15年8月13日(1730年9月24日)「堂島米市場」跡に幕府公認の**堂島米会所**を開設する運びとなる。

<御用米会所> 大坂 堂島・京都・大津

江戸時代の幕府公認の米取引所は(御用米会所)、大阪・堂島、京都、大津の3ヶ所。幕府米蔵のある浅草・蔵前(“幕府米蔵”の前に由来)が半公認。その他、桑名、酒田、鶴岡、新潟、尾道、赤間関(下関)などの米市は米集散地により地元大名公認の米市場(現物)が存在した。

幕府公認の大阪・堂島米市場は「堂島米会所」と呼ばれ、規模、取引量に於いて他の追随を許さなかった。ここで立った相場(価格)が全国の米市場の基準とされ指標となった。



旗振り通信の発達!

<堂島米会所 取引期間…三期(三季)商内 (あきない)>

○正米取引 (現物)	・第1季春物	1月 8日～ 4月28日
	・第2季夏物	5月 7日～10月 9日
	・第3季冬物	10月17日～12月24日
○帳合米取引 (先物)	・第1季春物	1月 8日～ 4月27日(限市)
	・第2季夏物	5月 7日～10月 8日(限市)
	・第3季冬物	10月17日～12月23日(限市)
○石建米取引 (小口先物) <虎市>	・第1季春物	1月 8日～ 4月26日(限市)
	・第2季夏物	5月 7日～10月 7日(限市)
	・第3季冬物	10月17日～12月22日(限市)

*限市 (きりいち) = 最終決済日

<米切手>



加賀藩

仙台藩

佐賀藩

尾張藩

<取引時間と取引の流れ>

- 正米取引(現物) ※現物の米は蔵屋敷に収納したまま、“米切手”(証券)を用いての商い。
取引は、朝四つ時(午前10時)から昼九つ時(正午)まで。
- 帳合米取引(先物) ※決められた期日(限市)(きりいち)までの売り買いによる差金決済。
取引は朝五つ時(午前8時)から昼八つ時(午後2時)まで。(昼九つ時(正午)には休憩があり)
※昼八つ時(午後2時)になると、一寸(約30cm)程度の縄に火を付け、この火が燃え尽きた時点で取引終了となる。
この間の時間を“火縄時間”と言った。

堂島米市場を支えた金融の仕組み



名代 大阪で屋敷を持つ事を禁じられた大名が自己の蔵屋敷の名義人として指名した町人が名代（名義人）

蔵元 蔵屋敷内の物品（米が主体）の管理・出納に当たる者（営業・管理担当）

掛屋 蔵物代金の受領・保管・送金を担当する者（財務担当）

<交野三山> 神宿る山 として、“葛城修験”の聖地



交野山
341m

旗振り山
345m

竜王山
321m



開元寺跡 石碑



旗振り山 山頂

交野市内から一望される旗振り山は、交野山、旗振り山は名前が示すようにこの山の山頂で旗が

竜王山と合わせて“交野三山”と称され、振られた事に由来する。

江戸時代中期(享保年間以降)大坂の堂島米会所から発信される米価格の情報を知らせるため中継点を設け、晴れた日には白旗、曇りの時には黒旗を振ってその様子を知らせる“旗振り通信”があった。

<旗振り通信>

江戸時代中期(享保年間以降)から、明治後期頃まで大坂の堂島米会所の米相場を各地に伝えるのに“旗振り通信”が行われた。見通しの良い丘や山の上に設けた中継点を次々に連絡し、手旗信号によって伝えて行った。

その中継所となった山が“旗振り山”である。江戸時代の半ばには堂島米会所の米価格は全国の基準となっていた。当時は“米本位制”であり米価は諸物価の基本(中心)となっており商人たちは、競って米相場(価格)をいち早く知ろうとしていた。

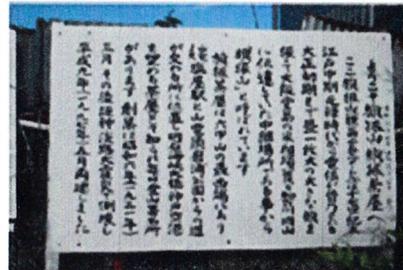
米相場(価格)は一日3回~4回程度伝えられ、熟練した手旗信号士が通信にあたっていた。中継所の間隔は各地域によって様々ですが、現在とは違い望遠鏡を用いれば、約24Km先まで見通せたと言われている。



堂島米会所



石堂ヶ岡
(大阪府茨木市・能勢郡)



神戸六甲山系 旗振り茶屋



須磨 浦上山遊園

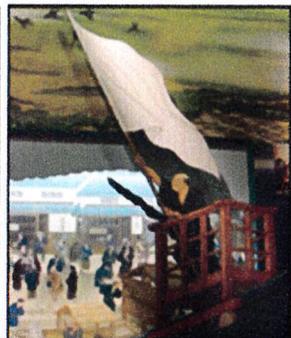


相場旗山 山頂
(滋賀県野洲市)

交野 旗振山 は、大坂「堂島米会所」からの“旗振り通信”伏見ルートの中継基地>



堂島米会所



旗振山 (交野) 345m



千鐘山 311m



天王山 270m

旗振り山 その他の呼び名

- ・ 旗振山 (はたふりやま)
- ・ 相場振山 (そばふりやま)
- ・ 相場取山 (そばとりやま)
- ・ 相場山 (そばやま)
- ・ 旗山 (はたやま)
- ・ 高旗山 (たかはたやま)
- ・ 相場ヶ裏山 (そばがうらやま)
- ・ 相場の峰 (そばのみね)

旗が畑に転じて…

- ・ 畑山 (はたやま)
- ・ 高畑山 (たかはたやま)

「堂島米会所」情報発信 ⇒ 到達時間

- ・ 和歌山 3分
- ・ 京 都 4分
- ・ 大 津 5分
- ・ 神 戸 7分
- ・ 桑 名 10分
- ・ 岡 山 15分
- ・ 広 島 27分

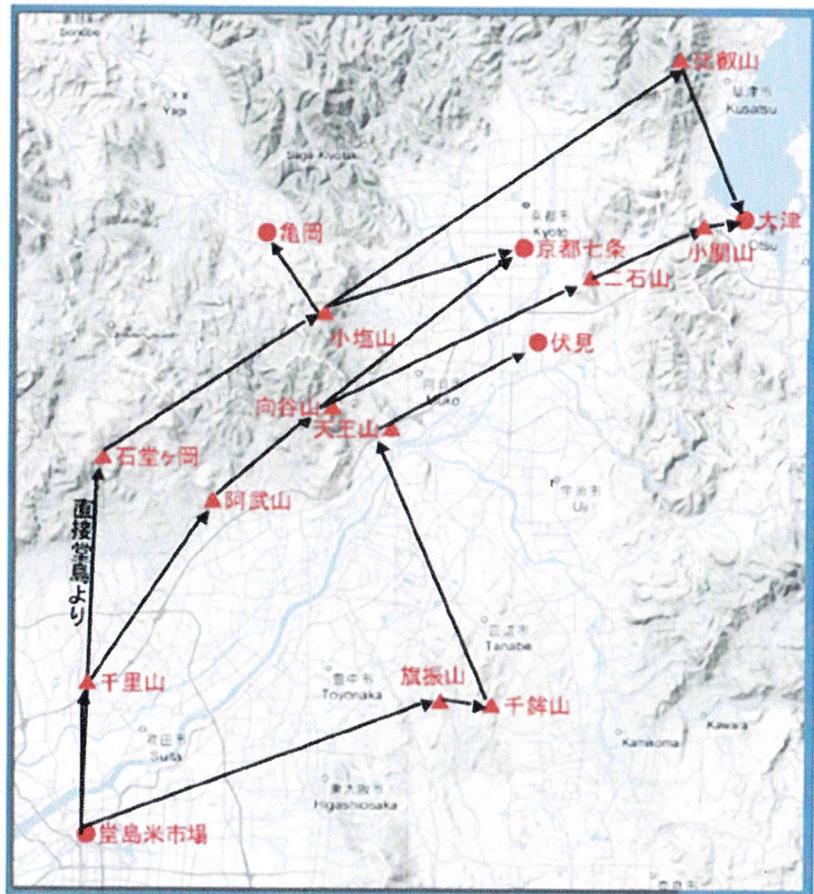
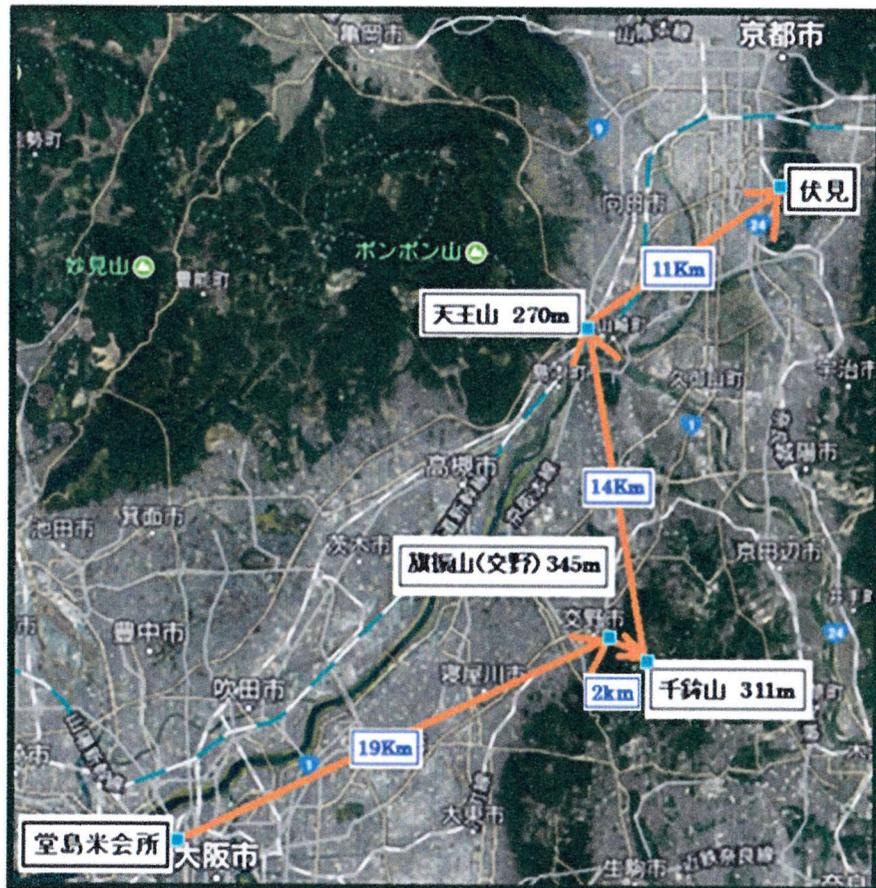
その他、四国・九州にも即日速報された。
江戸には箱根の山に飛脚を用いるため、
約8時間を要したと言われる。



伏見

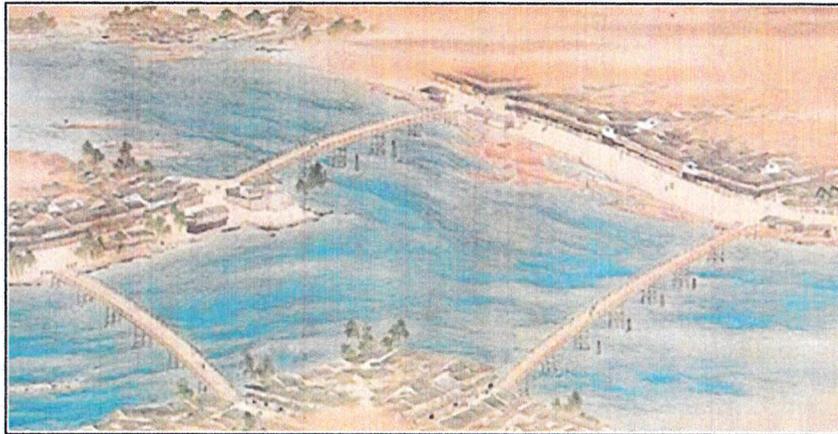
(江戸時代 物流経済の一大中心地であった)

“旗振り通信” 京都・伏見・大津ルートと中継基地

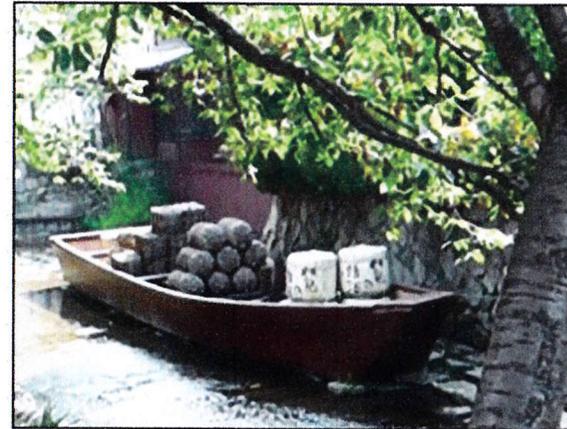


なぜ伏見？

江戸時代、伏見は政治・経済・流通の要の地であり、経済においては禁裏・公家方の御用米、伏見奉行御用米などの米を扱う米問屋が多く存在し、情報をいち早く収集し、利ざやを稼いでいたものと考えられる。



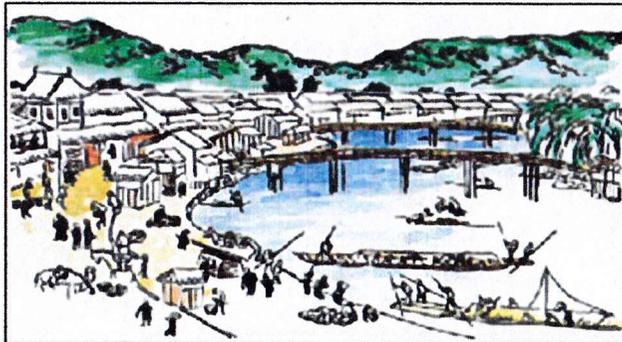
江戸時代（1700年頃）の伏見（円山応挙）



伏見 ⇄ 京都 高瀬舟（一之舟入）



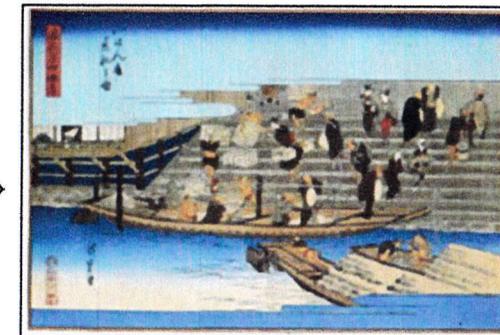
角倉了以



伏見 京橋の浜



三十石船（過書船）とくらわんか舟（枚方付近）



八軒家 浜（大坂 天満橋）

終わりに…

活況を見せる「堂島米会所」は、両替商などの金融機関の発達を促し、大坂は世界に冠たる金融商業都市でした。しかし、時代は変化し、米本位制の変化による米会所の衰退、幕末から維新にかけて「吟目廃止」「藩札処分」など、大坂商人(両替商)には手痛い状況が重なり大坂経済は賑わいを失う原因ともなった。

こ合わせて、明治維新の際、薩長土佐の武士には、この素晴らしい先物理論が理解出来ず歴史の舞台から消え去った。しかし、堂島米会所の先物取引のシステムは、現代の大阪取引所や米国の CME(シカゴ・マーカンタイル取引所)やCBOT(シカゴ商品取引所)などに代表される、世界各地の組織化された商品・証券・金融先物取引(デリバティブ)の先駆けをなすものであり、「堂島米会所」が世界の先物取引発祥の地として大いに誇るべきものである。

今や世界中で、やれ金融工学だ、リスクヘッジだ、レバレッジだとか申しますが、そもそもの元祖がここ大坂堂島の米市場だった。この頃の大坂は名実共に、世界一で、かつ世界最先端の金融商業都市だったのである。

『堂島米会所』の帳合米(先物)取引は、先物取引で最も重要とされるクリアリング(清算)システムを導入するなど、現在の金融派生商品(デリバティブ)取引の先鞭を成すものであり、現在に於いてもほぼ完璧なシステムである。

現在においては、だが、百年余の時を経て、“先物の地” →大阪(大坂)に“日経平均”先物・オプションなどの金融派生商品(デリバティブ)の取引が開始され、“先物の街”大阪に再び灯りがともり、賑わいを取り戻している。

まさに300年前のDNAが蘇った思いで感慨深い。

<参考文献>

- | | | |
|---------------------|----------------------|--------|
| 「大坂堂島米会所物語」 | 時事通信社 | 島 実蔵 著 |
| 「歴史に学ぶお米の先物取引」 | 原書房 | 島 実蔵 著 |
| 「旗振り山」 | ナカニシヤ出版 | 柴田昭彦 著 |
| 「金融先物の世界」 | 時事通信社 | 可児 滋 著 |
| 「日本両替金融史論」 | 文芸春秋社 | 松好貞夫 著 |
| 「大江戸経済学」 | 堂島米会所 貨幣改鑄と管理通貨制度 両編 | |
| 「日本永代蔵」現代語訳付き | 角川ソフィア文庫 | 堀切 実 著 |
| 日本最大の河川港湾 伏見港の生成と衰退 | 日本土木史研究発表会 | 論文集より |